



TITLE:

まえがき(<特集>我国に於る物性物理の研究体制について)

AUTHOR(S):

米沢, 富美子

CITATION:

米沢, 富美子. まえがき(<特集>我国に於る物性物理の研究体制について). 物性研究 1969, 12(1): 65-66

ISSUE DATE:

1969-04-20

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/87146>

RIGHT:

ま え が き

米 沢 富美子

今年に入って大学問題は普遍化し、殆んどの大学で研究者は程度と質の差こそあれ、何らかの形でかかわり合いを持つようになって来た。しかしその中で、学生が提起した「学問とは何か」「大学は如何にあるべきか」という本質的な問いに真面目に答えようという姿勢を示している研究者が何人あるであろうか？研究の自由の名の下に自分だけは無傷で、超然と研究に固執している研究至上主義タイプ、対学生の敵対意識だけを顕著に表わし、研究者、学生の内部での問題であるとの受け止め方、その他、我々のまわりにみられるいくつかの考え方の殆んどが、問題の本質を見誤っているのではないかと思う。広い意味での学術研究体制の矛盾やしおよせが随所で連鎖反应的に爆発したものであると我々は考える。個々の大学で独立に出されている問題は、一見普遍性のない個別の様相を呈しているかもしれないが、それは決してひとつの大学、ひとつの学部だけで閉じた問題ではない。

このような状況下で、我々物性研究者が、自らの置かれている立場を正しく認識することは、問題の根源を誤りなく把握するための第一歩であるという信念をもって、我々「物性研究」編集部は表記のようなタイトルで特集を作ることと決定した。

具体的経過を少し述べると、3月の編集会議（3月17日）で、物性物理の研究体制に関する特集号作成についての提案が、承認されて、5月号掲載予定で、編集部の中の何人かが仕事をまかされた。しかし、その直後（3月19日）に、百人委の選挙が近いことを知り、5月号掲載では間に合わないので、急遽、4月号目標に切り換え、いく人かの人達に原稿を依頼した。一方、物性グループの現在の事務局である東北大に連絡したところ、事務局でも、我々と似た意図をもって、物性グループその他の研究体制について調査中であることがわかり、お互いに情報を交換し合って、一人でも多くの人に資料を提供し得るよう努めることに意見が一致した。

一方、前述のように、学術研究体制に対する批判と告発のひぶたが切られた

米沢富美子

現状下で、百人委の選挙を目前にして、ただ客観的な立場で資料を集め、それを物性研究者に提供し、そこから何かがおこり得るかもしれないという根拠のうすい期待を抱いているだけで、我々は何かがしたという幻想をもち、これで事足りりとする事に対する疑問が、我々の間で起った。それでは何をなすべきなのか？ 何度か討論を行なった末、この問題を、より広くより多くの人間が共に考えられるようにと、3月末～4月初の年会を利用して、informal meeting をもつようよびかけることにした。このことに気付いたのは、年会の一週間前で、提案者の間で、十分な準備も深まった議論も出来ないまま、時間的な要請から、我々の意図を的確に反映しきれないままの形で、呼びかけの文章を、物性グループの何人かのメンバーに送り、4月1日夜 informal meeting を主催した。（informal meeting に於る議論のまとめも、この特集に集録されている。）呼びかけも、informal meeting も必ずしもあるべき形でなされたわけではなかったが、具体的な運動の経験や歴史を持たない我々にとって、技術的にも、又、より本質的に意識の面でも、その時点に於る限界であったと思う。

年会から帰ってから一週間余り、連日連夜（／＼）討論し合った上で、informal meeting 前後の自分達をふり返ってみる時、それをひとつの捨石として学び、我々自身の意識が高められたのを感じる。

研究体制及び大学問題に関する記事は、今後ひき続きとり上げて行きたいと思う。我々の編集方針に対する読者諸氏からの批判・助言を、談話室に投稿した我々の意見に対する批判と併せて期待したい。